

《論 説》

「死首の咲顔」クライマックスの不思議

中 田 妙 葉

一

五蔵、「いかにもしたまへ。この女、我がつま也。追出されば、こゝより手とりて出んと、兼て思ふにたがはざるこの朝也。いざ」といひて、宗の手とりて出でんとす。兄がいふ。「一足ひきては、たふるべし。汝がつま也。この家にてしぬべし」とて、刀ぬきて、いもうとが首切おとす。五蔵取上て、袖につゝみて、涙も見せず門に出んとす。父、おどろき馬にはね上り、「おのれ、其首もちていづこにか行く。我、先祖の墓におさめん事、ゆるさじ。それまでもあらず。兄めは人ごろしぞ。公にて誅せられよ」とて、いそぎ、村庄屋の方へしらせに行く。

これは、「死首の咲顔」のクライマックス、元助が妹の宗を、五蔵との婚礼のため五曹次宅に、輿入れに付き添ってきた一幕である。

元助は、主人の五曹次に折り目正しく向かい、我が妹の宗は、ご子息五蔵殿とかねてから相思の仲である。五蔵

殿が「こし入、いそぎてんと、ねがふまゝにつれ来たりぬ。日がらよし。さかづきとらせたまへ」と、言う。ところが、五蔵の父五曹次は、同族でありながら、貧しい元助の家族を「あさましき者」と嫌っており、二人の仲をずっと反対していた。この時も興入れしてきた宗に向かって、恐ろしい形相をして睨み付け、「帰れ。かへらずは、我手にも及ばず、男どもに棒とらせて、追うたんぞ」と、宗を五蔵の結婚相手とは認めずに、追い返そうとする。それに対し、元助は、再度説得を試みる。五蔵が望んだ事なのだから、五蔵を呼んで欲しいと頼む。しかし五曹次は、更に怒り「もとよりよめ子にあらず。死人ならばとくつれいね。五蔵いづこにをる。此けがらはしき、承知せずはいかに。よく計らずは、おのれも追ひうたん。親に逆らふ罪、目代どのに訴へ申て、とり行はせん」と言い放ち、やってきた五蔵を、そのまま足蹴にし、庭に蹴落とす。五蔵は、鬼のような形相の父五曹次に向かい、右にあげた言葉、「この女、我がつま也」と、宣言するのである。

宣言をしたものの、父の形相を見る限り、宗を嫁として迎えることを許すことはないと思った五蔵は、かねてより宗に告げていた、家を捨てて二人で生きていくことを実行しようと、「ここより手とりて出んと」する。

ここまでは、悲恋物語の展開として、何ら不思議なことではない。むしろ、出奔することさえ厭わないと言っていた五蔵が、有言実行するのだと、読者は意外に思う場面ではないだろうか。恋愛物語が悲恋になってしまふパターンとして、裕福な家の跡取りの男が、恋仲の女に、出奔も厭わないと言いながら、周囲の圧力により、女との約束を反故にして逃げてしまうという形式があげられる。「ますらを物語」の右近が正しく、この悲恋を引き起こす薄情な男の典型である。しかし、五蔵はそうではない。初志貫徹せんと、孝を尽くしてきた親を捨てて、宗と一緒に薄らうと、家を出ようとしたのである。

しかし、元助は、五蔵のその誠実な言動を、目の当たりにしているにもかかわらず、容赦なく宗の首を切り落と

す。理由としては、死にかけている宗は、もはやあと一足引くだけでも倒れる程であるから、せめてこの家で死なせてやる事が当然だ、というのである。しかし、これはあくまでも、元助の理屈である。宗が本当にそんな状態なのかという、描写はない。この元助の行動が、まさしく読者に解しがたいところである。五蔵と駆け落ちすることで、宗の悲恋は解消され、結実を迎えるかと思うような展開に為りつつあるところで、宗の幸せを誰よりも願っているだろう元助が、その首を切り落とし、結実を疎外するのであるから。

更に、不可解な展開は続く、義兄により妻の首を切り落とされた五蔵は、驚くことも怒ることもせずに、宗の首を「取上て、袖につゝ」む。そして、「涙も見せず」に家の門を出ようとするのである。家を捨ててまで一緒になろうとした妻を、手にかげられたにもかかわらず、五蔵はなぜ、涙も見せなかったのか。

二

この不可解な展開は読者を惑わし、結果様々な感想を残すことになる。

浅野三平氏は「大衆の喜ぶ甘い恋愛小説」⁽¹⁾という感想をもち、中村幸彦氏は「近世封建社会における結婚という興味ある問題を取り上げた」としながら、「推敲の不足もあって、大衆小説的気味がある」⁽²⁾という評価がなく、重友毅氏は「全体的に気の抜けた、話の筋だけが目立つものになっている。いわゆる二番煎じのあじきなさである」⁽³⁾と、手厳しい。また、この箇所を直接批判する森田喜郎氏は「物語の前後で不統一なところもあり、人間描写にも不十分な点もあった」⁽⁴⁾と言っている。高田衛氏のように「文章には、精粗のむらがあつて、やや読みづら」といところも、ないではない。しかし、読了したときに、不思議な感動を与える小説⁽⁵⁾と、肯定的な感想を残す人は、余り多くないようである。

また、元助のこの行動に対して、野間光辰氏は「無分別無思慮ただ発作的な行動」⁽⁶⁾と評している。それに対し、揖斐高氏は中村幸彦氏の「推敲不足」という評価を引用しつつ、この作品を肯定的に評価している。

意外に、秋成の緻密な配慮の行き届いた作になっている…（中略）…主題を抽出するための細かな分析にじゅうぶん堪えうる作品である…（中略）…主題を担う人物五蔵の「形象」についても、秋成の配慮はかなり周到であつて、「未成熟」という評価は当たらないのではないかと思う。⁽⁷⁾

しかしながら、この場面の元助と五蔵の行動は理解に窮したようで、元助は五蔵を誤解した結果の行動であつたと、二人の間には「食い違いのドラマとでもいふべきものが存在する」という見方をしている。少し長くなるが、引用する。

救うことの出来ない命ならば、妹の望みどおり五蔵の家で死なせたいというのが、兄元助の思いであつた。それを五蔵は「追出されば、こゝより手とりて出ん」と言つて、瀕死の妹の手を取つて出ていこうとする。五蔵の「善柔」の犠牲になりつづけ、その結果瀕死の状態にまで追い込まれてしまった妹の最後の望みさえ、その場しのぎで五蔵は裏切ろうとしている、と元助は誤解した。…（中略）…元助には、こうした事態の予測はある程度できていたのである。かねての覚悟どおり、「ますらを」元助は、自らの刀で妹の望みを叶えたのである。…（中略）…父を前にしての五蔵の「追出されば、こゝより手とりて出ん」という言葉は、それまでの「善柔」性を克服してこそ発し得る言葉であつた。しかし、興入れに際しての約束を反古にされ、五蔵への不

信感を増していた元助には、それは理解されていない。五蔵の「追出されば、こゝより手とりて出ん」という言葉は、妹を死へと追い込んだ五蔵の「善柔」の性による。その場しのぎの言葉としか元助には受け取れなかったのである。⁽⁸⁾

「無分別無思慮ただ発作的な行動」ではなく、「緻密な配慮の行き届いた作になっている」という視点からこの場面を捕らえ、何かしらの意味があると見ると「食い違い」という結論になるほど、この場面は不可解であることがわかる。森山重雄氏は、元助の形象が「ますらを物語」の源太と比べて「後退している」とし、首切りの動機を「性急すぎる」と評している。

彼が宗を輿入させた時、葬式の費用として、三両を用意していたから、死を予想していたことはたしかだが、彼の首切を動機づけている理由としては、宗の「せめて此家の庭に入て死なん」という願望と、「一足引ては、たをるべし」という頻死の状態しかないのである宗の「せめて此家の庭にんて死なん」という願望と、「一足引ては、たをるべし」という頻死の状態しかないのである。この動機は、『西山物語』のように七郎一人の胸のなかにたたまれているよりは、まだ肖然だが、「ますらを物語」ほどの必然がないことは否定できない。元輔はこの家で妹が死ぬときめているが、五蔵が失踪せずにその場にいたことは、元輔の首切の動機を弱めている。わたしはそれを「無分別無思慮ただ発作的な行動」とまでは思わないけれど、それが性急すぎたとは言えるだろう。⁽⁹⁾

恐らく、多くの読者は、クライマックスに対しては、まず森山氏が述べている印象と近いものを浮かべるのではないだろうか。そして、何故そのような行動に出たかと、「発作的」と突き放さずに、論理的に意義付けを突き詰めようとする、揖斐氏のような結論を導き出すことになるのだろうか。

「死首の咲顔」は、明和四年（一七六七年）十二月三日に、京都北郊愛宕郡一乗寺村で起こった、「源太騒動」が題材となっている。この事件を題材にして、建部の綾足は、事件後一ヶ月余りで、『西山物語』を出版している。その四十年後の文化三年（一八〇六年）四月十七日に、秋成は門人大沢清規を通じて、洛北円光寺で事件の当事者渡辺源太に出会った。秋成はこの時に受けた感動に突き動かされ、大沢から伝え聞いていた「源太騒動」の「まし事」を伝えようと、「ますらを物語」を執筆する。更に、その後二年ほどで、「死首の咲顔」を執筆するのである。

『西山物語』「ますらを物語」「死首の咲顔」三作の題材と成った「源太騒動」について、野間光辰氏が、京都町奉行の伺書ならびに評定所評議之趣から、事件の詳細を明確にされている。⁽¹⁰⁾それによると、騒動の顛末は次の通りである。

三

百姓渡辺源太（当時二十六歳）の家はもと郷士格であったが、父の彦太夫は六年前に死去し、豊かではなかった。母のつやは修学院郷士山田家の娘であった。源太家には、母と弟軍治・末妹やゑ（十七歳）が同居していた。源太家と同族であり、地続きに住む渡辺団治（五十六歳）家は、名字帯刀を許され、代々庄屋役を勤めていた。団

治は、次男右内と、その妹との三人暮らしだった。事の発端は、源太家のやゑと団治次男右内（二十歳）が密かに言い交わす仲になったことからである。

やゑと右内の仲は、かねてより母つや・兄源太も薄々気づいていた。再三意見するが、一途に思い詰めたやゑは、忠告を聞き入れなかった。そうするうちに、彼らの密通はうわさとなり、団治家の下女は無分別にやゑの母つやに告げ口した。母つやは兄源太に申しつけて、やゑを右内に一緒にさせるよう、団治に談判させたが、団治の対応は甚だ無礼で冷淡だった。

一方団治は大いに立腹し、右内にやゑとの関係を即刻断つように言い渡す。また、右内を縁者のもとへ追いやった。右内は同じ村の万屋利助に依頼して別れ話を進め、やゑも承知し、右内からの恋文を返却するつもりでいた。しかし、利助はやゑ宛の右内の書き付けを、やゑに渡すことを怠った。そのため、やゑは最後に今一度、右内の本心を確かめ、また自分の真意も知ってもらいたいという思いが募っていた。

別れるにしても、今一度右内に逢ってから別れたいと思うやゑを、母つやは親兄の異見に耳をかさない不孝者と思ひ込む。その結果、十二月三日、つやは源太に申しつけ、やゑを団治方に連れて行き、改めて縁組みを言い入れた。その際に、事が穏便に済むならよいが、団治の挨拶如何によっては、その場にてやゑを斬り捨てるように命じた。

果たして団治は全く源太の話に取り合わず、とりつく島もない。また、右内は親戚に預けて不在だというばかりで、一向に埒が明かなかった。源太はその場で、一刀の下に妹やゑを切り倒した。団治はそれを取り押さえようとしなかった。眼前に行われた殺人に度肝を抜かれて、茫然自失だったようである。

源太は京都町奉行に出頭し、捕らえられた。前例のない事件のため、関係者の処分はなかなか決まらず、一年

経った明和五年十二月に江戸の評定所でようやく処罰が決定している。結果は、源太は六十日以上入牢していたことを勘案して、改めてのお構いはなし。母つやはお構いなし。団治は押し込め五十日。右内は庄屋役を罷免された上、手錠三十日架せられた。その後、源太は庄屋役となり、右内は京都所司代与力吉田文九郎の娘と結婚し、二男をもうけている。

なお、京都町奉行所は源太の処分を「遠島可申付哉」と評定所に伺いを立てているが、評定所は京都奉行伺書に見える、妹やゑが「身持放埒」にも「右内と密通」し、それを母つやと兄源太が「再応異見いたし」たにもかかわらず聞く耳をもたず、「母^江対し不孝之段不埒^二付^一」というところを重く見た。源太はやゑを「母之指図^三而及殺害^一」したものである。「短慮二而与風殺」ならば遠島も相当であるが、「此もの仕業ハ短慮ニハ無之^一」、母に代わって親不孝の妹を殺害した、ということでお構いなしとしている¹¹⁾。

野間氏は、この処分を下した当時の思想について、百姓八左右衛門が、不義不孝之娘を相手の男もろとも殺害し、無罪になった先例と合わせて考察し、次のように結論づけている。

密通（いわゆる姦通は勿論、人の子または奉公人の、親または主人の許さぬ恋愛をも含む）は人倫に悖り社会の秩序を紊す重き罪とする思想、その思想に基いて、密通した子に対する親の私的刑罰権として、世間普通の懲戒（勘当・久離）以外に、場合によっては殺害するも致し方なしとして認める考えである。これは源太騒動の事件としての性質を考察する重要な手がかりであると思う。そしてまた源太が、たとえ母の命とはいえ現在の妹を、敢て殺害するに至った行為の背景には、かくの如き当時一般の倫理観と法思想があった。源太の行為は、必ずしも源太が武士であることを必要としなかったのである。¹²⁾

つまり、親の許さない恋愛は密通となり、親に殺害されても仕方の無いほどの重罪であった。また、「孝」という思想は当時それほどの倫理規範であったということがわかる。この倫理観を念頭において、他の二作『西山物語』と「ますらを物語」のクライマックスを見てみよう。

その前に、一つ注意しておきたいのは、当時の資料の京都町奉行の伺書ならびに評定所評議之趣には、源太は妹やゑを「殺害」したとあるだけで、斬首したという記述はどこにもない。⁽¹³⁾『西山物語』では、「かへが衣のえりひしとつかみ、ひきよせてのけさまにおさへ、太刀をぬきてたかむなさかをさす。…(中略)…二たび三たびさすほどに、ほぞちなして死にいりぬ。」と、胸元を突き刺す描写となっている。源太騒動を題材にした話のうち、始めに斬首したことを明確に書き示しているのは、事件後一ヶ月余りの明和五年正月に、京都尾上座の「けいせい節用集」である。

渡辺源次兵衛は、妹そのと渡辺左門が言い交わしていることから、母おちうに左門の父団右衛門に嫁にしてくれるよう頼まれ、無念をこらえて頼むけれども、仲の悪い団右衛門はどうしても聞き入れない。源次兵衛は、終に妹そのを手につけ、首を打ち嘆き悲しむのである。このように、かなり事実には忠実な筋運びとなっていた。その四十年程後、秋成は「ますらを物語」と「死首の咲顔」を執筆し、二作品はいずれも兄が妹を斬首するクライマックスとなっている。

秋成は、綾足の『西山物語』を無益なつくりごとの「いたづら文」だと批判し、「まさし事」を伝えるために書き記した「ますらを物語」は、実際のところ題名はなく、藤井乙男博士が『秋成遺文』に収録する際につけた仮題である。その二年程で、同様の題材を用いた物語が「死首の咲顔」という題名をつけて執筆されたのである。つまり、「ますらを物語」と異なり、秋成は意識して題名に「死首」という言葉を用いたことになる。

四

『西山物語』は、源太騒動に『太平記』巻第二十三の「大森彦七が事」を脚色として加え、彦七の後裔として設定している。七郎は「もののふの道を磨きて、今の世のますらをと、人にも称らるる男」である。七郎は母が病んだ時に八郎の家族が母を看病してくれたと、八郎に恩義を感じている。そして、太刀合わせの直前、七郎と八郎は各々の一家の行末を案じ、どちらが勝ったにしても、必ず相互に相手の家族を養育すると約束する。

源太騒動でのやゑと右内の「みそか」事であった恋は、『西山物語』では七郎家のかへと八郎家の宇須美の恋となり、歌物語風の擬古小説として書かれている。太刀合わせに勝った八郎家の祝宴の席で、人々の寝静まったあとでの琴を枕とした契りを交わし、こうして成立したかへと宇須美の仲を、かへの母も兄七郎もそれとなく認め、「能きあはひ」と思っている。更にかへの母は見守っているだけでなく、かへと宇須美二人を前にして、「雪霜にかはらぬ」「松柏こそ、たゞ真心の男女なれ」と論したり、久しく中絶えた二人が、松尾の神詣でに行きちがつて逢えなかった時など、「いかにもして思ふごと、計らひて参らせむ」と、かへを励ましてさえているのである。

それに対し、秋成は「ますらを物語」で、源太の妹の弟姫と団次の息子右近の二人の恋は、親兄の許さぬ「みそか」事として描いている。秋成が二人の恋を「みそか」事として書いた理由は、実際の源太騒動の原因は、正しく二人の密通にあったからである。源太騒動の「まさし事」を、自分の「さかしら」によって「謹つけ」ないよう、「譎りならぬには後長くつたへよ」と、忠実に書いたのである。上に記したように、当時の法思想においては、親の許さぬ恋は「密通」となり、「身持放埒」と見なされ、親に殺害されても仕方のない重罪であった。源太騒動の話は犯罪事件であり、「まさし事」を描くのであれば、その事実を変えることは出来ない。二人の恋は「密通」でな

ければならず、同時に姉姫は「身持放埒」でなければならない。そのどれ一つの要素が欠けても、源太騒動の「まさし事」を「瑾つけ」ることとなってしまう。

その二年後に秋成が執筆した「死首の咲顔」では、宗と五蔵の「かたらひ」は「みそか」事ではなく、「母も兄もよき事に兄ゆるしてけり」という公認の仲になっている。この点において、秋成が批判した『西山物語』に酷似している。また、五蔵が「通ひ絶え」たことで、宗は「かりそめ臥に病ひして」、やがて「恋に病む」という病状になってゆく描写をも、『西山物語』に学んだのではないかと思われるほど、類似している。そして、「死首の咲顔」では『西山物語』の二人を取り巻く環境を更に発展させている形をとっている。というのも、宗の一家は、宗と五蔵を異見するどころか、二人の仲を励まし、相手方に二人の縁談を伺いに行くだけで終わらない。最終的には、宗の病が重くなり「けふあすよ」と言うまでになったことから、「茶たき酒あたたためてまゐらす。盃とりてむねにさす。いとうれしげにて、三々九度ことぶきもと輔うたふ。」と、宗の母と兄は率先して二人の祝言をあげる。宗の決意も畢竟、「ますらを物語」の姉姫のように「云かひなき人」を怨みつつ、自分がまず死のうという心情と異なってくる。死を急ぐ姉姫を無駄死にさせないため、母が源太に命じて、姉姫を嫁入りに団治家に連れ出したのに対し、宗は五蔵の内諾を得た興入れになるのである。そしてこの点こそが、他の二作品には見られない脚色である。

「ますらを物語」では、姉姫の話で、右内は「親ゆるしなくば、一たびはいづ地にも逃げかくれて、出交はる世をまつべきもの」と言ったと言うが、当の姉姫がその言葉に対し「なぐさめかねし偽りか」と、疑いをもち、「たうらみつべきは男の心也。」と、右内に恨み言を述べている。多くの研究者が指摘するように、この作品で一番影が薄く、よくわからないのが右内である。

『西山物語』では、恋に病んでいくかへからの、「此のうへは夜のまぎれにもしのび出でて、すゑはかたゐともはりはずべきか。又いかなる淵河にもまぎれうせなむや。」という言葉に、宇須美も「ただひとつ心におもひさだめける。」と反応する。この二人の心は通じ合つてはいるものの、宇須美はなす術をもたない。終いには父に逆らえず、かへと離別する起請文を書くことになる。

右内や宇須美がそれぞれの思い人への表し方は異なつていても、二人が共に父には逆らえない性格であり、考え方の持ち主であると言ふことは同じである。

五

ここで気になるのは、宗の一家が五曹次の承諾無くあげた祝言で、果たして夫婦といえるのかと言ふことである。それについては、高田衛氏が興味深い説を述べている。五蔵が宗のもとに通つてきたことを捕まえて、五蔵と宗の男女関係が「たんなる婚約などではなく、一種の婚姻状態である」のだという。秋成は作品の中で「絶ずとひよる」「契りやふかき」「かよひ絶たり」と「かよひ」の語を記すことで、二人の関係は「通い婚」であつたことを示しているという。

「死首の咲顔」は、「此頃の事」を省く小説だが、「物がたりざまのまねび」……を方法として、書かれている。「物がたりざま」とは何か。『源氏物語』のような、平安朝物語の姿かたち、ということであろう。

平安の昔は、婚姻は「通い婚」（招婿婚とも）であつた。物語でも婚姻は「通い婚」、つまり男が女の家へかようという形で書かれていた。近世になると家父長制下、結婚は家と家との結びつきを兼ねて、嫁入り婚が大

勢をしめた。ただ、婚姻の形態の推移は複雑で、階級や地域によっては、古い婚姻の遺制をのこしたところも、また独自の(足入れ婚のような形態を持つところもあったという。事件のモデルになった地域、洛北一乗寺村の村人たちの結婚が、明和(一七六四―七二)の時期、古い習俗(通い婚)を遺していたか、どうかはわからない。しかし、秋成は「死首の咲顔」では、「物がたりさまのまねび」とも言うべき、「通い婚」を、五蔵と宗の関係として書いたのである。だからこそ、母も兄も「よき事に兄ゆるし」たのである。『ますらお物語』とは、まったくちがう設定なのである。…(中略)…。

通い婚の成立は、男の側の意志と行動である。男の親の意向など関係ない。もちろん女の家に通うのだから、女の側の親・兄の「見ゆるし」は必要条件となる。⁽¹⁴⁾

つまり、すでに通い婚を宗の家族に許してもらっている五蔵・宗の男女関係は、家父長制度における「家」の論理上における「嫁入り婚」が果たせるかという問題に突き当たることになる。四人で行った祝言は、正しく「嫁取り婚」挙式である。それまで公叔座の故事に習い男子がふたつの原則に挟まれた場合、前後の順序を立てたように、五蔵は両親への「孝」を先にし、宗への「貞」を後にした。それを示したのが、宗の「不孝」を叱った行為と言葉である。⁽¹⁵⁾しかしながら、宗が重篤となり、「けふあすよ」の状態になって、五蔵は次の言葉を口にする。

「かからんとおもふにたがはざりし事よ。後の世の事は、いつはりをしらねばたのまれず。ただ此のあした、我がいへにおくりたまへ。千秋よろづ代也とも、ただかた時といふとも、同じ夫婦なるぞ。ちち母のまへにて、入りさきよからんぞ、せめてねがふなり。せうとの御心たのもしくはからひてたべ」

これは五蔵が今まで後にしていた「貞」を先に、「孝」を後にして行動する、ということの決心を示した言葉である。宇須美、右内と同じ立場の五蔵は、「死首の咲顔」で、始めて家長に向かう性格と思考を持つに至る。それも、他の二人よりも明らかに「孝」を念頭に意識している人物であることは、すでに述べたとおりである。

それに対し、宗の形象が「ますらを物語」の弟姫と比べて後退しているということも、多くの研究者が指摘するところである。ただ、宗の形象は、『西山物語』のかへの形象と相似点が多く見られるのである。宗もかへも、思いに会えないことから病に伏し、弟姫のように「御暇たまはらばや」とか「我先しなん。云かひなき人の音づれは待たじ」と、強い意志を示すことはない。ただ、思い人の訪れを待ち、別れの話に嘆き悲しむ女性である。宗は五蔵の発言、行動全てを受け入れて信じる素直な女性である。この点を念頭に置いて、もう一度「死首の咲顔」のクライマックスの場面を振り返りたい。

六

一、何故、元助は五蔵が宗と出奔しようとする間際に、宗の首を切ったのか。

二、何故、五蔵は、宗の首が切り落とされたにも関わらず、涙一つ見せずに出て行こうとしたのか。

三、何故、宗の切り落とされた首は咲顔だったのか。

以上三点について、私見を述べてみたい。

元助は母の代理として、五曹次家へ宗の興入れを行った。つまり母と元助は同じ思考だと考えられる。この点について、大塚靖弘氏が大変興味深い見解を述べておられる。「相手の家に入るのは嫁入りの第一歩であって、完成ではない。完成は、相手の家で嫁としての人生をまっとうし、死してのち相手の家の墓に入ることである。途中で

相手の家を追い出されるのは、不完全な嫁入り―結婚の失敗である。五蔵がこれ以上病気の宗を待たせることはできないと判断し、自分の家に迎え入れる決心をしたのも、……実家にいたままで死んでしまったのでは結婚したことにならないからである。⁽¹⁶⁾」宗も元助もそのことはよく分っている故、五蔵の父に向って元助は「病して死ぬるに、せめて此家の庭に入りて死なんと、願ふままに、連れ来たる也。ここにて死なせ、此家の墓にならべて葬れ」というのである。宗の母と兄は、宗が五蔵の家で死に、五蔵の家の墓に入ることこそ、五蔵の家に嫁ぐことに成功したと見ていたのである。

そうであるから、五蔵が宗の手を引いて家を出ようとしたときに、元助は、せっかくだが五蔵の家に入ったのに、家から出て死んでしまったら嫁入りは失敗に終ってしまう。どうせ今日か明日の命なら、五蔵の家で息絶えるべきだろうと考え、宗の手を引いて家を出ようとしている五蔵に向って、元助は「一足引ては、たふるべし。汝がつま也。この家にてしぬべし」と言つて、刀を抜くや妹の首を切り落としたのである。

では、五蔵はその所業に対し、何故「涙も見せず門にいでんと」したのだろうか？この問題を考えるに当たり、嫁入りについての認識は、五蔵も同じであつたと見るのが妥当であろうということである。宗と家を出てしまつては、宗の五蔵家への嫁入りは失敗に終わる。とはいえ、鬼の形相し、自分を足蹴にする父五曹次を目の前にして、「一足引ては、たふるべし」弱つた宗を此処には置いておけないと思ひ、手を引いて家を出ようとした。それ故、元助が所業はたとえ五蔵にとって思ひがけないものだとしても、嫁入りの成功という共通認識のもと、驚くこともしなかった。驚くどころか、五蔵の頭は、宗を嫁入りさせるために、最終段階の家の墓に入ることを遂行せんとする意識しかなかったのではないだろうか。だから、涙も見せずに、門を出ようとした。そしてまた、五曹次も同じ

認識をもつがゆえ、息子の挙動をみてすぐさま、宗を嫁入りさせる手段を取ろうとしていることを察し、「おのれ、其の首もちていづこにか行く。我が、おやおやの墓におさめん事ゆるさじ。」という言葉がでたのである。

最後に、宗の首は何に微笑んでいたのだろうか。上記したように、宗は常に受身で、五蔵の全てを信じ素直に受け止める女性である。彼女が病気になるのは、五蔵に会えないからである。もちろん祝言に喜びを表していたが、大塚氏が説くように宗が母や元助と同じように、嫁入りに執着していたようにはその描写からは思えないのである。むしろ素直な宗は、母や兄が「家」に執着していることを理解し、それに素直に従っていただけではないだろうか。宗にしてみれば、五蔵と一緒にいられること、五蔵の気持ちが大変であり、形式というのは二の次ではなかったか。それは、五蔵が心を込めて諭す言葉に、宗は一生懸命に答えようとしている。そこには、嫁入りという「家」に対する執着は微塵も感じられないのである。では何に微笑んだのか。宗が生きていて最後に聞いた言葉は紛れもなく、鬼の形相の父に対し、「この女、我がつま也。」と言いきった言葉である。そして元助は五蔵のその言葉を引用し「汝がつま也。」と言って、首を切り落とす。宗にしてみれば最期に耳に残った言葉は、五蔵の宣言である。

つまり、母や兄が求めた「嫁入りの成功」ではなく、五蔵の「我がつま也。」という真摯な想いに対する笑みではなかったか。更に、例え兄に殺害されようと、自分の首をとっさに袖に包んで我が家の墓に入れようする、五蔵からこのような想いをかけられる事に対しても誇らしかったのだろうと思われる。これらの謂わば純粹で気丈な笑みだからこそ、「いとただけしけれ」と人々の脳裏に焼き付き、語り伝えられて行ったのではなからうか。

- (1) 浅野三平「死首の咲顔」をめぐって―源太騒動と綾足・秋成」(『上田秋成の研究』桜風社、一九八五年) 六〇五頁。
- (2) 中村幸彦「解説」、『日本古典文学大系五六 上田秋成集』岩波書店、一九六九年、二二頁。
- (3) 重友毅「秋成二題」『文学研究』第三二号、日本文学研究会、一九七〇年六月。
- (4) 森田喜郎『上田秋成の研究』和泉書院、二〇〇三年、三九五頁。
- (5) 高田衛「死首の咲顔」素描、「文学」第九巻・第三号、岩波書店、二〇〇八年、一八一頁。
- (6) 野間光辰「いわゆる源太騒動をめぐって(下) ―綾足と秋成―」『文学』第三十七巻・第七号、一九六九年、五〇頁。
- (7) 掛斐高「死首のゑがは」の主題、「国語と国文学」第六十七巻・第七号、東京大学国語国文学会編、ぎょうせい、一九九〇年七月、四〇頁。
- (8) 注7に同じ、三八頁。
- (9) 森山重雄『幻妖の文学 上田秋成』一九八二年、三一書房、二二六頁。
- (10) 野間光辰「いわゆる源太騒動をめぐって(上) ―綾足と秋成―」『文学』第三十七巻・第六号、一九六九年、五二・五三頁。
- (11) 注10に同じ、四七・四八頁。
- (12) 注10に同じ、五〇・五一頁。
- (13) 長島弘明氏は「死首の咲顔」考」(『国語と国文学』第八十五巻 第五号、至文堂、二〇〇八年五月、八一頁)において、この点を指摘している。「そもそも源太騒動において、やゑが斬首されたか否かは、実は明らかではない。『百箇条調書』にもその記述はないし、また『西山物語』にもそうは書かれていない。首が切られたことをはっきり記すには、渡辺家後裔の言い伝えなどを除いては、源太事件をすぐに取り込んだ明和五年正月の京都尾上座の『けいせい節用集』(おそのと左門が首を討たれる)と、秋成の『ますらを物語』(弟姫のかうべは、膝の上に落ころぶ)、「死首の咲顔」である。」
- (14) 高田衛「死首の咲顔」素描、「文学」第九巻・第三号、岩波書店、二〇〇八年、一八四・一八五頁。
- (15) 注14に同じ、一八八頁。

(16) 大塚靖弘「春雨物語」「死首のゑがは」論〔上智大学国文学科紀要〕三、一九八六年一月、七五頁。

(17) 注16に同じ、八三頁。

— なかた わかば・東洋大学法学部准教授 —